

3. スポータイゼーションとグローバルイゼーション ～過程社会学的視野～

英国ラフバラ大学教授 ジョゼフ・マグワイヤー

本日、私はグローバルスポーツシステム（地球のスポーツ体制）の既存の構造を述べ、分析する。グローバルスポーツシステムに言及するとき、現代スポーツシステムが国家間でいかに多様であるかはいうまでもない。しかし、スポーツ社会学者は、スポーツの国家的特徴を検討することに加えて、現代スポーツがいかにグローバルイゼーション過程に結びついているかをも探求しなければならない。グローバルな諸条件の探求は西欧社会学とスポーツ社会学にとって主要なテーマになりつつある。グローバルスポーツ過程の社会学的研究者はグローバルな人間の諸条件への重要な内省を潜在的に有している。ともあれ、これが本日の私の議論である。スポーツのグローバル過程が検討され、我々が発見する事は、スポーツ社会学のこれまでの伝統的な思考よりもよりいっそう重要であるということである。

グローバルスポーツシステムの鳥瞰：出発点

グローバルスポーツシステムを鳥瞰(mapping)するとき、三つの出発点が考えられる。第一に、スポーツが位置付けられる社会を研究しないスポーツの研究は論外であるということ。ここでは、相互に関わる政治的、経済的、文化的そして社会的な様式—それらは現代スポーツを形成し、これらの様式がいかに人々の行動の広がりをもたせ、そして制限するかの両者を含むものであるが—の検討が必要とされる。しかしこの観察自体は限定が必要である。社会は一大変希なケースを除いて—決して他の社会から孤立して存在することはない。商業の絆、福祉、移住そして文化は長い人類の証である。最近のグローバルイゼーションの過程は地球の遠く離れた人々を相互に関わらせる相互連鎖の新たなセットを解放した。国民国家

間あるいはその内で、スポーツ研究が位置付けられる。エリート的な現代スポーツの実践や消費(鑑賞)はこうした中で最もよく理解される。

第二に、グローバルスポーツシステムを追跡し、記述し、分析するために社会学者は過程社会学的視野を採用することを強く勧めたい。すなわち、社会学者は時空間の次元を考慮することが無いままに現時点を検討する傾向を避けなければならない。社会学者は歴史的かつ比較的方法を活用しなければならない。彼らは、グローバルスポーツの現在の様式がどのようにして過去から生まれてきたのか、そして文明化のものがきといかに関わっているかを、説明しなければならない。現代西欧スポーツの形式、人的構成、イデオロギーの誕生、普及、グローバル化のモデルは後に概説する。

第三は、グローバルイゼーションそれ自体の概念である。これは何を意味するか？ここでは、それは人間関係の絆を良くも悪くももたらすような、政治的、経済的、文化的、社会的な相互依存のますます拡大しつつあるネットワークである、と言及しておこう。グローバルイゼーションの過程は近年だけの事でもなく、地球全域で同レベルで起こったものでもない。これらの過程—地球規模の相互関連の増加を含みつつ—はその本性からして大変に長期である。それにも関わらず、最近の変化はますます弾みをつけている。これらの過程の「非同等性」にもかかわらず、地球的動向を参考せずに地域や国家の経験を理解することは困難である。オリンピックゲーム等は、世界のある地域から他の地域へのレジャースタイル、習慣、諸活動の流れの生きた具体例である。

人々の生活条件、信条、知識そして活動は開かれたグローバル化に織り込まれている。これらの過程は地球経済、多国籍的国際文化そしてある程

度の国際的社會運動に規定されている。大規模な多国籍的あるいは地球經濟、技術交流、コミュニケーションネットワークそして移民の様式が、この相互関連の国際的な様式を特徴づけている。結果として、人々は空間的かつ時間的な次元をそれぞれに経験しつつある。今、時間のスピードが増し、空間が「縮小」しつつある。現代のテクノロジーは人々のイメージ、観念そしてマネーが地球上を猛烈なスピードで駆けめぐる事を可能にさせた。これは、既述のように、相互依存を一層高めると同時に、世界を一つの総体として考えさせるものである。人々は自らの生命や生活が単一の社會空間—地球—の部分であることを受け入れつつある。以上のような三つの視点を起点として、現代スポーツの検討に入ろう。

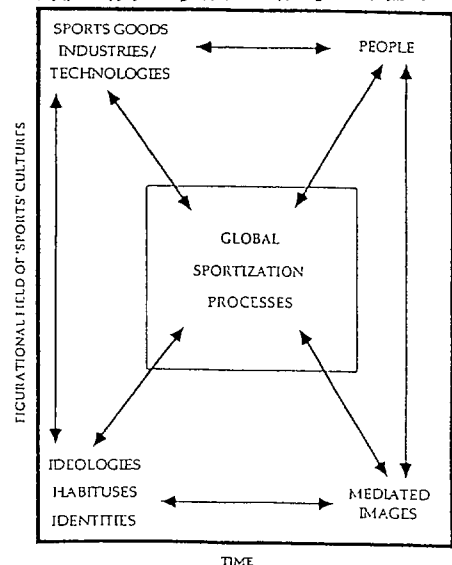
地球的条件と現代スポーツ

現代スポーツが不均等な権力関係で特徴づけられた地球的な相互依存連鎖のネットワークに編み込まれているという考え方は、スポーツイベントやレジャーの服装の消費を参考に説明できる。アイスホッケーを例に考えてみよう。地球上の多くの国々の人々はNHLのアイスホッケーの試合をサテライトで見ている。これらのゲームで、ベストプレイヤーは北アメリカ、ヨーロッパそしてアジアから引き抜かれている。彼らはスティック、スケート、ユニフォーム等の道具を活用するが、それらはスウェーデンでデザインされ、カナダで資金調達され、アメリカやデンマークに集められる。そして北アメリカやヨーロッパの大衆市場で売られる。例えば、スケートという道具は、その分子構造レベルでの研究と登録商標はアメリカでなされ、日本で製造される。この文化製品の地球的な生産と消費面には数社の多国籍企業が参入している。消費者への展示は地球規模のメディアスポーツ生産複合体(sport production complex)によって提供され、地球的テレコミュニケーションネットワークの部分であるテレビで放映される。

スポーツ・レジャーウエア産業もまた、人々が文化製品を消費する場合いかに地球規模の過

程に結合しているかを示すうえで、有効である。ファッション問題として、スポーツシューズが消費文化の統合的な特徴を示している。主要なブランドの一つがNIKEである。このシューズの購入と展示は、デザイナー、製造者、供給者、流通者そして親会社あるいは仲買人—この場合NIKE—を含む「ダイナミックなネットワーク」の最終段階の事象である。NIKE本部はアメリカオレゴン州にあるが、準契約者は地球上にまたがっている。それらの調達者と製造会社はタイ、シンガポール、南朝鮮そして中国等の南東アジア諸国に所在する。デザイナーは世界をカバーするような要求(それは地域的な嗜好にもアピールする)に対応したシューズの生産を試みる。地域的な独占的販売活動は地球的規模のマーケティング戦略によって支えられながら、適切な分配を保障する。ここで再び、NIKEはスター選手やスポーツ・レジャー行事を支持、推奨することによってメディア=スポーツ生産複合体を活用する。さらに、NIKEはテレビのスポーツ番組や他の番組の中での宣伝を活用する。つまり、文化が以前にも増して相互に交信し、競合し、対比しそして対立することはより明確である。この文化間の統合や優位性の競争は地球規模で起こり、図1のような五つの主要な次元で図式化される。

図1 地球的スポーツイゼーション過程における「対抗の減少と多様性の増加」の予備的モデル



一つの次元は旅行者、移住者、亡命者、出稼ぎ等の「人々」の国際的な動きであり、「テクノロジーの次元」は（国内かつ多国籍）企業によって生産された機械や備品の国家間でのかつ政府機関間での流動によって形成され、「経済的次元」はマネーや同等物の世界中への急速な流動に集中しており、「メディアの次元」は新聞、雑誌、ラジオ、映画、テレビそしてビデオによって作成され配布される国家間のイメージや情報の流動を可能にする。そして最後に「イデオロギー的次元」は国家あるいは反国家のイデオロギーや運動に関わる理念の動向に結びついている。

すべての五つの次元は20世紀後半のレジャー・スポーツの発展に見いだすことができる。プロスポーツ選手や音楽家たちの地球的規模の移住は、最近数十年の明らかな特徴である。これは今後においても同様であろう。用品、備品、複合的なゴルフコースの「景観」等の全地球にまたがる流動が最近数十億ドルのビジネスに成長してきている。それ自体、スポーツ分野での多国籍の成長を示している。経済的な問題に関わって、明らかに地球的規模でのスポーツ競技場における財政の流れは、人材、賞金そして推奨における国際流通ばかりでなく、スポーツのマーケティングにおいても中心となりつつある。

メディアのレベルの発展もこれらの次元と密接に関わっている。このメディア＝スポーツ生産複合体は個人的スポーツ労働移住者、レジャーの様式そして特別な文化メッセージのイメージをより多くの視聴者へ伝える事を企図している。バスケットボールプレーヤーのマイケル・ジョーダンのマーケティングはこれらのプロセスの生きた実例である。メディア＝スポーツ＝資本の連携は、あるレジャー活動の「地域レベル」と地球的モデルとの同一化を強いている。そうすることへの失敗は地球的メディア＝市場の中で勝ち抜く能力の欠如とみなされる。イデオロギーレベルでは、サッカーのワールドカップやオリンピック等の地球的規模のスポーツ行事は本質的に多国籍的であり、時には「国家」の枠を越えるイデオロギーの表現

手段として機能する。これらの地球的スポーツの動向をいかに理解するかを見る前に、最初に述べたように、スポーツの現在の様式がいかにして過去から生まれてきたかを見ることも重要である。

グローバルなスポーツ過程のモデルへ向けて

現代スポーツはどこから来たのか、そしてそれはどこで生まれたのか？これらの初期の段階を理解するために、4つの主要なポイントが必要である。

- (1) 大変長期の構造化された過程が含まれたこと。
- (2) 相互依存の発展的な連鎖には求心力かつ遠心力の多様なバランスがあったこと。
- (3) こうした過程のいろいろな段階で利益を得たグループや機関と逆に遅れをとった人々との間の権力のバランスの変化を検討する必要があること。
- (4) 国家中心主義とヨーロッパ中心主義の両者を避け、また、ますます拡大し、増加しつつある相互依存のグローバルネットワークの文脈で現存のヨーロッパスポーツの諸構造を見ること、

である。古代世界やヨーロッパ、アジア、南アメリカの諸文明の中に儀式的活動、民俗的ゲームそしてレクリエーションがあったことは証明されているが、現代スポーツは、蒸気機関車と同様に、イングランドで最初に誕生した。これらの段階を、図2を参照にしながら述べてみたい。

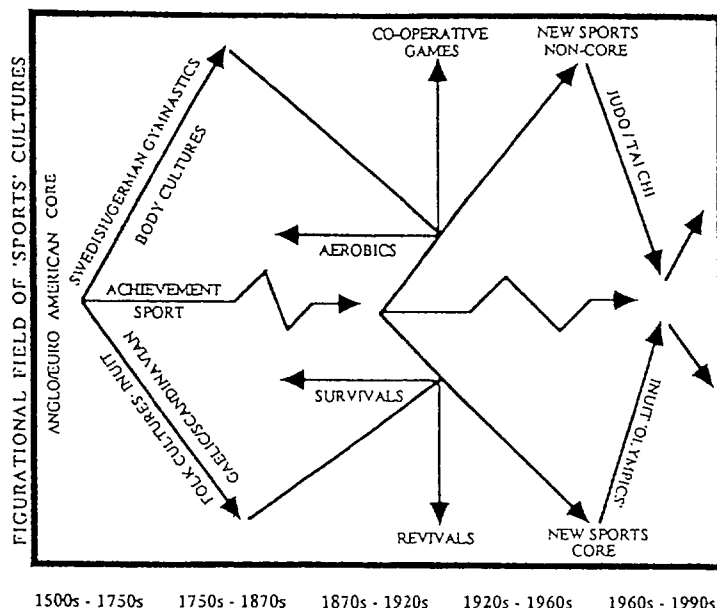
イングランドでの最初のスポータイゼーションは二段階をとった。第一の17、18世紀の段階は、そこで主要な余暇が始まり、現代スポーツを生んだが、そこではクリケット、狐狩り、競馬そしてボクシングが誕生した。そして第二の19世紀の段階ではサッカー、ラグビー、テニスそして陸上競技が現代的形式を取り始めた。この議論は1920年代から1960年代へと続く第四段階と重複する19世紀後半から20世紀初期の第三段階のスポータイゼーションを提起することによっていっそう明確になる。この第四段階で、スポ

ータイゼーション過程は西欧的観念によって支えられた。しかし西欧的コアと非西欧諸国家との間の対立は明白であった。しかも中心的な国々の中での優位性を巡る対立もあった。1960年代後半に始まるごく最近では、第五期のスポータイゼーションが明確化しつつある。これら地球規模で

の現代スポーツ様式の誕生と普及は広範なグローバルライゼーション／文明化過程と緊密に結びついている。

私はここで、後半の三期に焦点化してみたい。

図2 グローバルスポータイゼーションの流れ



第三段階のグローバルスポータイゼーション

第三段階のスポータイゼーションはヨーロッパ大陸や公式かつ非公式な大英帝国への「イングリッシュ」的スポーツ形式を特異に普及させた。(この場合のイングリッシュとは英国の4つの地域、つまり England, Scotland, Wales, Northern Ireland の一つの England の事であり、4つの地域でも特権的な地位を占めてきた。：内海) この普及は二つの相互に関連する過程に密接に関わっている。つまり「厳しいナショナリズムの誕生」と「グローバルライゼーション過程のほとぼしり」である。

前者で言えば、この時期我々は「国家」感情の強化、民族国家の誕生、そして伝統の起点・発案 (invention) を確認できる。ここでスポーツは決定的な役割を果たした。19世紀の最後の30年間は、既存のもの (the old) の普及、新規の発明、

そして多くのスポーツの国内外での制度化を見た。こうして、スポーツは国家アイデンティティや競争的な地域の対立の媒介や指標となった。スポーツの普及が国家の特殊なスポーツの選択や発明を通してそのナショナリズムを新たに表現する一方、それらの国家がその標準の主要な設定者—イングランド人—の文脈で事を進めたことも記す価値がある。

一方、グローバルライゼーション過程の離陸段階のいくつかの指標は次のように示される。国際諸機関の増加；コミュニケーションの地球的な様式の発達；地球規模での競争や賞の発展；そして国際的にますます標準化される「権利」、市民権そしてヒューマニティの水準の発達、である。ここで、スポータイゼーション過程の第三段階がこの離陸期に関わっていることが示唆される。スポ

ーツ発展のいくつかの視点はこれらの相互関連を注目する。例えば、19世紀の第四四半世紀は、スポーツの誕生と普及、国際スポーツ組織の設立、国家チーム間の競技会の成長、特定のスポーツルールの広域での受容、そしてオリンピックゲームのような地球的規模での競技会の設立等である。20世紀に入り多くの種目の世界選手権の設立はスポーツ界でのグローバルイゼーション過程化の印でもある。

これらの相互関係によっていくつかの重要な問題が生じる。スポータイゼーションのこの段階で、「西欧人」、特にイングランド人、は優秀な「プレーヤー」であった。しかし、彼らだけでなく、デンマークやスウェーデン体操、ドイツトルネン運動、ノルウェーから北アメリカさらに広域へのスキー(skiidraet)の普及はすべてグローバルなスポーツ発展のヨーロッパ化の具体例である。スポーツの人材、形式、イデオロギー、イメージの普及は地球的規模のマーケティング戦略のいくつかの一つであるが、この段階で、それは文化交差における力関係のバランスを反映している。北アメリカスポーツはイングランドにますます対抗し始めた。1920年代と1930年代に、バスケットボール、野球、アイスホッケーそしてバレーボールのようなスポーツがより「アメリカ」中心の形態を持ちながら、ヨーロッパ、南アメリカそしてアジアの太平洋岸の諸地域へ普及した。1920年代以降、世界の覇権主義闘争が起きてきたが、スポーツの領域では、この覇権争いは単に西欧とその他の地域との間ばかりでなく、西欧内でも起きた。

この過程への意図的、非意図的の視点がある一方、この過程の主要な長期的影響はグローバルな「スポーツ」文化間での対抗の減少である。さらに、グローバルなスポーツの発展における現在のいくつかの問題点は、すでに第三、第四段階のスポータイゼーションにその同等物を見いだすことができる。例えば、初期の段階で、最も強力なスポーツ国家になりつつあったアメリカ合衆国へ対抗して、多国籍チームが形成された。これは1912

年のストックホルムオリンピックへの..... 大英帝国チームの形成でも明白である。この多国籍チーム形成の試みは第五段階のゴルフ、テニスにおけるアメリカに対する「ヨーロッパ」チームの形成でも見られる。そして近い将来のオリンピックでは統一EUチームの結成が欧州委員会で本当に示唆されている。にも関わらず、伝統的なスポーツは、第三段階のスポータイゼーションの「国家」/スポーツ形成に関わる主要な伝統に、未だに人々を縛り付けている。民俗的ゲームもまた生き残り、地域かつ国家アイデンティティ政治がヨーロッパ生活の未だに決定的な部分となっている。

第四段階のグローバルスポータイゼーション

1920年代から1960年代へ掛けて、西欧がスポーツ組織、スポーツ行事での利潤、そして諸行事に関わるイデオロギー的意義を管理してきた。「西欧人」と「非西欧人」は活発に(受動的の反対として)、英/欧-米中心から普及したスポーツのいくつかの見地を擁護した。スポーツは深遠な文化や構造の運搬者であり、第四段階ではこの文化が西欧主導であったし、今もそうである。まさに、スポーツはこの段階で「グローバルな慣用語」になった。グローバル化するスポーツもまた特殊なタイプの西欧的男性的文化をもたらした。かくてスポーツは人類にとって文化や構造の最も強力な移行機構(transfer mechanisms)の一つであるが、そう指摘しつつも、グローバルな「スポーツ文化」の西欧的優位性が過去において完全なものであったが、現在もそうだということはいできない。ときおり、非西欧人は西欧的男性スポーツ人材、形式、モデルそして市場化に反対し、再解釈、再編成するばかりでなく、彼らの土着的なレクリエーション的な文化をも、地球的規模で維持し、育てそして普及しようとする。

競争的スポーツは西欧社会の世界観を伝えたが、このことが1920年代と1960年代に、非西欧あるいは本当の西欧文化にある人々がそれらを無批判で受け入れたということの意味はない。トロブリアン(Trobriand: パプアニューギニ

アの一つの島)クリケット、日本野球、パプアニューギニアへのスポーツの普及、そして20世紀になっての「フィンランド野球」の発展のすべてが地域、国家、地球のダイナミックな相互交差を示している。確かに、土着の文化はあるスポーツ形式を受容し、それを再構成し、そしてそれを元の国へ再照射する上で、熟達していることを示してきた。皮肉にも、アメリカンフットボールは、ラグビーの形式だがイギリスの文脈を越えて普及しているという点で、この代表的な例である。ついで、中心国もまた外国の文化を擁護し、「再構成された」スポーツはその中心より遙かに広く普及している。このグローバルスポーツタイゼーションの段階は、現代スポーツの発祥国(イギリス)の緩やかな衰退をも示した。グローバルスポーツの形成過程でイングランドの男性は、生まれながらにして勝利者となる「天与」の権利を持つと考えていたゲームで—この第四段階の初期に、仲間の西欧人によって—打ち負かされていた。

ところで、第四段階はより優位な政治経済—そこにはスポーツの西欧的覇権的統制もある—を明らかに含んでいるが、統制は決して完成してはいない。敵対は多様な形式でもたらされた。例えば西側と旧ソビエト連邦、共産圏との間の冷戦のようなものである。それはスポーツの世界でもより一般的であった。女性の権利のゆっくりとした主張や男性的優位性の強調(hegemonic masculinity)への反発も始まった。第四段階の後半は、非西欧国家のスポーツでの卓越さ、時には抜群さへの上昇によって特徴づけられる。非西欧国家は以前の植民地支配者特にイギリス人を、土着のレクリエーションにおいてでなく以前の支配者のゲームにおいて、打ち負かし始めた。しかしこの成功はスポーツの分野に限定されたが。

グローバルスポーツタイゼーションの第五段階

変化しつつある権力バランスは1960年代後半のスポーツタイゼーションの第五段階で強まり、それは現在バドミントン、クリケット、サッカー、卓球そして陸上競技を含むスポーツ種目で明らか

である。アフリカ、アジアそして南アメリカ諸国が前進してきており、グローバルスポーツの英/欧—米による管理は弱まっている。国際スポーツ組織やオリンピック運動の管理はゆっくりで不均等であるが西欧の独占的な手からすり落ちつつある。これらの傾向はスポーツの諸文化間で起きつつある混合の促進でいっそう強められつつある。ある範囲の「民族ゲーム」と同様に、東洋のマーシャルアーツが西欧のコアの周辺に普及してきた。メディア=スポーツ生産複合体は「同一性(sameness)」—特にアメリカスポーツの形式で—を市場化している。そして地球的流動を統制しているグローバルな政治経済は、たとえ「地域」であろうともその消費する文化製品を自由に選択できなくさせている。しかし、このことは、グローバルな市場戦略が差異を讃えているという点を見失ってはならない。すなわち、文化産業は新種の民族的商品を継続的に探し求めている。これらの民族的商品は地域文化の中の特別な「適所」で標的にされている。日本の相撲のイギリスへの普及やアジアのマーシャルアーツはこれのより一般的な実例である。これらの過程で影響を受けた文化や国家アイデンティティがグローバルシステムの周辺でなく、中心部に進出しつつある。グローバルライゼーション過程は中心地方内でも不均等であることがある。

音楽、食物そして特にスポーツ分野でそうであるが、グローバルスポーツタイゼーションのこの第五段階はスポーツ文化の混交(creolization)を含んでいる。国家アイデンティティそれ自身と全体としてのスポーツ文化の両者が多元化過程を進むとき、単一のスポーツがその国を代表するということではできなくなっている。スポーツ労働者(プロ：内海)の地球的な移動は多文化性と多民族性(polyethnicity)を強めている。これらの傾向を頭に置くならば、西欧スポーツの人々、統括者たちが、ごく最近のグローバルライゼーション段階において西欧国家の中で自己不信や不確実感・不安を経験しつつあるということは、驚くに当たらない。これらのスポーツの過程も「西欧の非中心化」と

併行するかもしれない。これらのプロセスが弾みを集めるように、新たな権力バランスが発生し、新たなアイデンティティが徐々に生まれて来た。

結論：グローバルスポーツ過程を理解する

私がこれまで論じてきたことから次のように結論づけることができる。つまり、「西欧」社会は長い間、特別にヨーロッパ諸国家の中の上層グループと同義的であった。「文明化された」すなわち西欧化された行動様式が、西欧人による居住やあるいは他国の上層階級による同化を通して、普及した。「西欧」内で外部者に対する上層階級による植民地化を示すような「二重拘束」の傾向は、「外部」（非西欧）諸国家と人々への西欧の対応に決定的に見ることができる。それらの普及と共に、全体として文明化やヒューマニティの特別に検討された視点が生じてきた。「西欧」社会の人々は世界的レベルでは上層グループの様に振る舞い、スポーツを含む彼らの嗜好や行為はその一部を構成し、それらは「西欧」社会の中でエリート文化に対しても同様な影響を与えた。それらは差別、名誉、権力の標識として機能した。「西欧」の上昇は、しかし、その「勝利」が不可避ではなかった。さらに、「西欧」文化もまた長い間非西欧文化の形式、人々、技術そして知識によっていろいろと影響を受けてきた。一言で言うなら、これらの文化交差は「西欧」が文化交差で優位を占める遙か以前に遡る。

強調すべき他の視点がある。グローバルスポーツ発展の意図的かつ無意図的な視点の両者が追求される必要がある。すなわち、多国籍機関や多国籍資本家階級の意図的な行動が短期的—長期的なうえに—かつ潜在的により重要である一方、無意図的で、相対的にはより自主的な多国籍的实践が優位を占めている。これらの実践が多国籍機関と多国籍資本家階級の実質的な計画を「構成する」。さらに、異なった国家グループによる非土着的文化商品の消費は活発であり異質的である。グローバルスポーツタイゼーション過程への反対も可能である。しかし、現実にはグローバルスポーツ/レ

ジャー製品の生産と消費の政治経済が機能しており、それが資本家的かつ西欧的スポーツ文化の狭義の優越性へ導くものである。従って、グローバルライゼーションはより上層階級によるグローバルな動向への接近を管理し規制する試みであり、同様に土着の人々がいかにこの過程に反抗し、さらに彼らの文化産物をリサイクルするかということである。我々はスポーツのグローバルライゼーションとスポーツ文化のいっそうの多様化を目の当たりにしている。

西欧がグローバルスポーツの構造、組織、イデオロギーそしてそれらの達成において勝利したということはある程度妥当なことである。非西欧的文化は、西欧スポーツに対抗し、それを再解釈し、そしてグローバルな規模で彼ら自身の土着的レクリエーション活動を維持し、育てそして促進する。スポーツ発展のスピード、規模、量は、西欧によって管理されている人々、技術、財政、イメージそしてイデオロギー等の広範なグローバルな動向に密接に関わっている。その一方で、長期的には、いろいろな文脈で西欧の非中心化が進んでいることも事実である。スポーツも例外ではない。同質性と異質性の両方を検討する多原因的、多方向的な分析を採用することによって、研究者たちはグローバルな規模で現在起きている文化混交を究明する上ではよりよい位置にいる。

今後、スポーツは、その内容、意味、管理、組織そしてイデオロギーの諸点について19世紀的かつ20世紀的観念に挑戦しながら、異なった文明のブロックといっそうの議論を進めるであろうことを、スポーツ社会学研究は示している。この議論の中で、スポーツ社会学者はグローバルな人間の条件のいくつかの重要な視点を注目するであろう。(内海訳)

* * *

以上は、一橋大学後援会の援助により1999年3月20～26日に招聘されたイギリス・ラフバラ大学体育・スポーツ科学・レクリエーションマネジメント学部スポーツ社会学部門、ジョゼ

フ・マグワイヤー教授の2回の講演の第一回目（3月23日）のテキストの翻訳である。第2回目の講演は「イギリススポーツ社会学の現状と展望」であった。

マグワイヤー教授は1956年生まれの新進気鋭の学者であり、国際スポーツ社会学会の会長も務めておられる。理論的にはN. エリアスやE. ダニングの流れを汲む「フィギュレーション社会学派」であり、スポーツ社会学のもう一方の潮流「カルチュラルスタディーズ派」とは若干意見を異にするが、本人の表現では後者をも内包すると考えている。

本講演はスポーツのグローバリゼーションにスポーツタイゼーションという概念を適用し、その歴史的、構造的把握を試みている。これまでのスポーツ社会学が歴史的研究の視点に欠けるという思考が背景にあり、エリアスらの『スポーツの文明化』を典型とする業績からの多大な影響を読みとることができる。

また、社会学のこうした「拡張」が、西欧における歴史学や哲学の社会学への吸収に関係するものなのか興味あるところである。（本誌、ドイツのリュール博士の項を参照。）現に、マグワイヤー教授の所属するラフバラ大学の体育・スポーツ科学・レクリエーションマネジメント学部はイギリスの関係学部でも、その規模と内容において最も充実したものであることは異論の余地はないが、そこでもスポーツ社会学の充実の一方で、スポーツ史、スポーツ哲学領域は存在しない。

さて、本講演に対して、「マルクス主義における歴史性、構造的性の概念との関連はどうか」という質問も出されたが、十分な回答は得られなかったように思われる。討論時間、交流時間が十分でなかった事もあるが、もっと根本的なことは、例えば、そうしたマルクス主義の概念を応用した「対抗」としての研究論文が対置されない限り、概念だけでの批判では、マグワイヤー教授にとってもあまり生産的な意味は持たないということである。また、2回の講演を聴いて、今後の展望が未

だに読み取れないという意見もあったが、これは社会学の根本問題にも関わる。社会学は今後の展望をいかに課題とするか、特に現状の混沌とした社会（私にとって、本誌の拙稿で見るとそれは「多国籍企業段階」として極めて明瞭であるが：内海）にあって、社会学はいかなるスタンスをとるのかは単にマグワイヤー教授だけの課題ではない。

ともあれ、参加者にとって現在のイギリススポーツ社会学の一つの先端を学習することができ、自らの研究をも問い返す大きな機会となった。また、単に拝聴する段階から研究交流の段階へ、一歩進展することもできた。マグワイヤー教授と講演会参加者、京都での講演の機会を設けていただいた立命館大学の山下高行教授に感謝したい。そしてこうした機会への援助をいただいた一橋大学後援会に心から感謝申し上げたい。

最後に、1999年6月発行の氏の近著を紹介して締めくくりたい。

Maguire, J., *Global Sports*, Cass, 1999.

(29th July, 1999 by K. Uchiumi)